

45歳の おっさん 異世界召喚に 巻き込まれる



45sai no ossan, isekaishokan
ni makikomareru

2

著者
よっしい

イラスト:市丸きすけ





クイーンシー

エトムントの庶子にして、Sランク冒険者。掴みどころのない雰囲気ながら、戦いの腕前は一級品で頼りがいがある。

エルヴィーラ

セアリアス帝国の第一王女。気品あふれる絶世の美女だが、戦闘になると人格が変わり……？

エトムント

白河が身を寄せたセアリアス帝国の皇帝。我儘放題に見えて、慈愛の心も兼ね備え、国民からの人気は高い。



サージュ

ファートとコンビを組む謎多き冒険者。探求心が強い。



すぎ うら か なえ
杉浦香苗

白河とともに召喚された怖がりなOLで、抜群の料理の腕を持つ。小悪魔っぽい一面も？

メーネア

召喚の儀式を行った王国の王女。王城では冷遇されており、その環境を変えるため白河に同行する。

オリアーナ

帝国有数の大商会を切り盛りする女傑。だが、思い込みが激しい。

しら かわ こ じ ろう
白河小次郎

本作の主人公で、心優しき45歳のおっさん。突如異世界に召喚されるが、発現した無数のスキルで楽しく生きる。



Characters

第一話 アフェールの新拠点と魔改造^{まかいかいぞう}

この世界に召喚されてから一月が過ぎ、また一月が過ぎようという頃。

俺——白河小次郎、四十五歳のおっさんの異世界生活も、ここ商業都市アフェールに拠点を構えたことで、ようやく、ほんの少しだけ落ち着きを取り戻しつつあつた。

いやまあ、落ち着いたとは言つても、物理的な意味だけなんだがな。

おっさんの心中は、いまだに台風一過どころか、台風のど真ん中にいる気分だ。

ところで、朝、淹^{うな}れたてのコーヒーを飲むのが、すっかり日課になつている。

スキルで購入した自家発電用の大型発電機が、風車のかすかな回転音に混じつて静かで安定した唸^{うな}りを上げているのが分かる。

こいつがまた、なかなかの優れものでね。

日本的一流メーカー製で、ちょっとした町工場ぐらいなら余裕で電力を貯^{まか}える代物だ。

その電気を使って、これまたスキルで取り寄せた全自动エスプレッソマシンが、豊かな香りを立てながら黒い液体を抽出していく。

「……ふう」

日本にいた頃は、一日に三杯は欠かさなかつたからなあ。

ブラックで、砂糖もミルクも入れないのが俺の流儀。

この香り、この苦味。

……その、すまん、見栄張つて嘘ついてた。

俺、ミルクも砂糖も入れる派だつた、マジすまん。

これだけは、異世界に来ちまつた今でも変わらない、俺の心をリセットしてくれる大事な儀式なんだ。

淹れたての熱いコーヒーをまた一口にする。

うん、美味い。

豆は、もちろん日本から取り寄せた最高級のキリマンジャロだ。

贅沢だつて？

いやいや、これくらいは許してほしい。

おっさんの唯一の贅沢なんだから。

結婚する前はどちらかといふと紅茶派だつたんだが、妻が試しにイタリアの有名メーカーのエスプレッソマシンを買つてきて以来、見事にはまつてしまつて今に至る、と。

そのときの妻のドヤ顔、今でも思い出すと笑える。

あのエスプレッソマシンには本当に足を向けて寝られない。
うん。

この異世界で取り寄せたのは、さらにその上の業務用モデルだけだな！

さて、改めてだが、日本からこの異世界に召喚されてしまつてから、もうすぐ二月が経とうとしている。

皆さんお元気ですか、と心の中で呼びかけてみるが、当然、返事はない。

分かつてるよ。

分かつてるけどさ。

そうでもしないと、やつてられないときがあるんだ。
おっさんは、まあ、何とか元気にやつている。

……なんて、強がつてはみたものの。

実際のところ、どうなんだろうな。

体は元気でも、心は毎日すり減つている。

そんな感じだ。

こうして静かな朝を迎えていたと、あの日の出来事がまるで嘘のようだ。

全ての始まりは、あのいつも通りの通勤電車の中だつたな……。

気づいたら異世界の城の中にいて、胡散臭い連中が「勇者召喚だ」なんて言つてきただけど、真つ赤な嘘つぱちだった。

連中の本当の目的は、俺たち日本人からスキルを奪つて用済みになつたら殺すこと。

世も末だよな。

俺のスマホに偶然表示された『鑑定』スキルで、『強奪の腕輪』の正体を見破つてなきや、今頃どうなつていたことか。

もう時間がない。

そう思つた俺は、時間稼ぎと状況を探るために、尿意を我慢できないと伝えてトイレに連れていつてもらうことにしてたんだ。

そこで出会つたのが、黒光りするデカイG（ゴキブリ）。

なぜかそいつと意思疎通できちまつて、俺に『ティマー』スキルがあることが発覚した。

とんでもないスキルだが、このダチになつたGがあとで最高の仕事をしてくれたんだよな。トイレからの帰り道、案内役だつたメーネア王女（用済みだからと実の父親に殺される運命だつたとのちに知つた）と、同じく巻き込まれた香苗ちゃんと二人で、生き残るために一世一代の大芝

居^{ばい}を打つことにした。

いよいよ俺のスキルが奪われる番が來たとき、一瞬の隙^{すき}をついて大臣の腕に『強奪の腕輪』をはめて、覚えておいたスキルを奪う呪文^{じゆもん}を唱えてやつた。

おっさん、こういうハツタリと機械いじりは得意なんだわ。

スキルを奪われ、崩れ落ちる大臣や兵士たち。

混乱の極め付けに、ダチのGたちが大群で押し寄せ、兵士たちをパニックに陥れる。

その隙に、俺たちはメーネア王女の案内で堂々と城の正面からずらかつた。

こうして、俺と香苗ちゃん、それにメーネアちゃんの、長くて危険な逃亡劇が始まつたんだ。

城を出てからも、もちろん楽な旅じやなかつた。

追手もいるかもしれないし、金もなければ身分を証明するものもない。

それでも、俺がスキルで奪つた道具と金、それに日本から取り寄せた物資を元手に、何とか食いつなぎながら国境を目指したんだ。

今思えば、無謀な計画だった。本当に、よく生き残れたもんだ。

魔物と遭遇し、死にかけたこともあった。

それでも、おっさんのスキルと、メーネアちゃんの機転^{きてん}、香苗ちゃんの料理（これが本当に美味くて、何度も心を救われた）で、何とか危機を乗り越えて、隣国であるセアリアス帝国の商業都市

アフェールまで逃げ延びてきた、というわけだ。

濃すぎるだろ。普通に考えて。

ライトノベルでも、もうちょっと展開に間があるぞ。

アフェールでは、トレイナー商会っていうデカい店の娘さん——オリアーナと、まあ、ちょっとした事故（おっさんが原因）で知り合ってな。

いろいろあつたんだが、結局トレイナー一家に気に入られちまつた。

おかげで、街外まちはずれにあつた『ワケあり』のゴースト屋敷——本当に幽靈ゆうれいが出やがつたんだ、これが——を格安で手に入れることができて、そこを拠点にしたんだ。

なんてつたって、この屋敷では日本との通信が可能だつたからな。

ちなみにあとからまた話すが、今じゃ、おっさんのスキルで取り寄せた日本の品物（シャンプーとかリンスとか）を売る店まで開いちまつて、何とかこの世界での基盤を築きつつある。

……これが、ここ二ヶ月の、おっさんの人生で起きたことの、ざつくりとしたあらすじだ。

日本に帰りたい。妻や子供たちに会いたい。その気持ちは、一日だつて忘れたことはない。

この気持ちを忘れたら、俺は俺でなくなつしまう。

おっさんの持つ『異世界売買』スキルだつて、日本の商品は取り寄せられるのに、こっちの物を日本へ送ることはできない、一方通行のスキルだ。

情報伝達も同じで、妻とのメールのやり取りも、以前屋敷の書斎で試して以来、一日に百文字程度の短いメッセージを送受信するのがやつと。
写真データも、サイズを極限まで圧縮きゅくせんしないと送れない。

動画なんて、数秒のものを送るだけで何時間もかかる始末だ。

『元気か？』

『こつちは元気だよ』

『愛こころしてる』

そんな、電報でんぱうみたいなやり取りが限界。もどかしい、本当に。

それでも、妻から送られてくる息子や娘の動画や写真は、何よりの心の支えだつた。だから、おっさんは諦めない。

この世界で生き抜いて、情報を集めて、絶対に日本へ帰る方法を見つけ出す。

そのための、拠点作り。

そのための、資金稼ぎ。

今やつていることは、全て、日本へ帰るという最終目的のための布石ふせきなんだ。

この店も、この家も、全部が日本へ繋がつていてる。

そう信じている。

そう自分に言い聞かせないと、心が折れそうになるときがある。

……ただ、一つ大きな問題があつてだな。

刺激が強すぎる。

一つ屋根の下で、うら若き美女二人と暮らすというのは、四十五歳のおっさんには、正直言つて日に近くなっている気がしてならない。

いや、おっさんの自意識過剰かじょうだよな？

そうだよな？

向こうは俺を父親か、あるいは歳の離れた兄のように思つてているだけ。きつとそうだ。

そうに違ひない。

そうでも思い込まないと、こつちの理性が持たないんだって。おっさん、小心者なんだから。

で、今朝もリビングの食卓では……。

「シラカワ様、おはようございます。今朝は少し冷えますから、こちらのスープをどうぞ。体が温

まりますわ」

メーケアちゃんが、にこやかに湯気の立つカップを差し出してくれる。

「ああ、ありがとうございます。助かるよ」

「白河さん！ こちらのパン、新しく焼いてみたんです。味、どうですかね？」

香苗ちゃんが、期待に満ちた目で俺を見つめてくる。

「うん、美味しいよ。外はカリッとしてて、中はふんわりだ。天才だな、香苗ちゃんは」

「えへへ、ありがとうございます！」

「カナエさんのパンは本当に絶品ですわ。わたくし、ここに来るまでパンというものをあまり好んで食べなかつたのですが、今では毎朝の楽しみになつておりますもの」

メーケアちゃんも、うつとりとした表情でパンを一口食べる。

「メーケアさんにそう言つていただけると、作った甲斐があります！ 白河さんが日本から取り寄せてくれたレシピ本が本当にすごくて。毎日が発見です」

香苗ちゃんは、俺がスキルで取り寄せた料理本を、今ではすっかり自分のものにしている。おっさん、おかげで毎日美味しい飯が食べて、本当に助かつてます。

どうやら、異世界の食材を使いながら、日本の調理法や味付けを再現するのにハマついているらしい。

彼女の探求心と才能には、本当に頭が下がる。

「でも、すごいのはシラカワ様もですわ。だって、わたくしが知らない道具や知識を、まるで魔法のように取り出してくださるのですから。この前いただいたマヨネーズっていう調味料も、びっくりするくらい美味しかったです」

「ああ、あれな。野菜にも合うし、パンに塗つても美味いんだ」

「はい！ ですよね！ だから今日はそのマヨネーズを使って、新しいサンドイッチを試作してみようと思つてるんです！」

キラキラした目で語る香苗ちゃん。

本当に料理が好きなんだな。

こんな風に、甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのは、本当にありがたい。
ありがたいんだが……。

近い近い近い！ 距離が！

二人とも、俺の隣にぴつたりと座つてくるもんだから、シャンプーのいい香りが漂つてくるし、
目のやり場に困つちまう。

駄目だ駄目だ。

俺には日本に愛する妻と子供たちがいるんだからな。

香苗ちゃんたちは、俺が保護すべき大事な家族……みたいなもんだ。
うん。

断じて、そういう目で見てはいけない。

……なんて、毎日自分に言い聞かせるおっさんの身にもなつてくれよな、本当に。

この生活、いつか理性のタガが外れそうで、正直めちゃくちゃ怖い。

夜、物音で目が覚めたとき、静かな寝息を立てている一人と一つ屋根の下にいるというだけで、
心臓が妙な音を立てる。

これ以上は、本当にまずい。

さて、おっさん、日本に戻れない可能性も常に頭の片隅に置きつつ、こちらの世界で少しでも充実した生活を送るようにとあれこれ考えている。

それで手に入れたこのアフェールの家に、いろいろと手を加えすぎて、ちょっとした魔改造状態になつてしまつているんだ。

どんな風になつてているか、具体的に話していくとしよう。

これも全部、日本に帰るための布石なんだからな！ 多分！



改造その一、電力インフラ整備。

まずは電気だ。

近代文明の根幹、それが電気。

ステータスを見たりスキルに利用したりできる石板ブレートで、『異世界売買』を開いて検索したら、普通に家庭用の小型風力発電機が売られていた。

それで、思わずポチつをしてしまったのだ。

で、届いたはいいが、このままでは重すぎて屋根の上どころか、庭に設置するのも一苦労だ。

「な、なんですの、これは……鉄の巨人、ですの？」

メーネアちゃんが、庭に鎮座する風車のパーティを見て目を丸くしている。

「いやいや、鉄の巨人じゃなくて風車だつて。これで電気を作るんだよ」

香苗ちゃんですら、現代日本の知識があるとはいえ、実物を見るのは初めてのようで、興味津々だ。

そこで、これまたスキルで小型のクレーン車とパワーショベルを購入。

おっさん、こういう重機、好きなんだわ。

子供の頃、ミニカーでよく遊んだもんだ。

日本ではフォークリフトの免許を持っていたから、建設機械の操作もまあ基本は同じようなもんだろうと高を括っていたら……思った通りすんなり操作できてしまつた。

「シラカワ様、その鉄の馬は、一体どのように動かすのですか？」

「いや、これはガソリンっていう燃料で動くんだ。まあ、魔法みたいなもんだけどな」

俺はレバーを操作し、パワーショベルのアームを巧みに動かしてみせる。

二人は「おおー！」と歓声を上げた。

ちよつとしたヒーロー気分だ。

パワーショベルで庭に基礎の穴を掘り、クレーンで風車の支柱を吊り上げて設置。

その後、速乾性のコンクリートを流し込んでガツチリと固定。

「す、すごいです……白河さん。まるで土木工事の職人みたい」

「いやあ、ゲームでやつたことがあるだけだよ」

本当は似た経験をしたことがあるだけだが、見栄を張つてしまつた。

シミュレーションゲームが好きだったのは本当だけど！

そのあとも試行錯誤を繰り返し、随分と苦労はしたが、何とか安定した発電ができるよう

なつた。

そして、その日の夜。

俺は二人をリビングに集め、天井から吊るした裸電球のスイッチを入れた。
パツ！

温かいオレンジ色の光が部屋を満たすと、二人は感嘆の声を上げた。
「まあ……！」

「わあ……！」

「これが、でんき……。ロウソクでも魔法でもないのに、こんなに明るいなんて」

メーネアちゃんが、うつとりと電球を見上げている。

やつてみるもんだね、本当に。

「すごい……すごいです、白河さん！ これがあれば、夜でも本が読めますね！」

香苗ちゃんは、子供のようにはしゃいでいる。

そうだよな、この世界では夜の明かりは貴重なんだよな。

日本の当たり前が、ここでは特別なことなど、改めて思い知られる。

で、調子に乗つて、敷地内を流れる小川を利用した水力発電にも手を出してみたんだが、これが

なかなか上手くいかなくてね。

一週間ほど悪戦苦闘して、ようやくこちらも何とか実用レベルの発電ができるようになった。

こういう試行錯誤、嫌いじやない。

むしろ、燃えるタイプだ。

発電システムは、一つだけだと何かあつたときに心許ないからな。

複数確保しておくのが、サバイバルの基本だろ？

今、我が家の中には、大小合わせて十基の風車が悠々と回り、小川では水車がカラカラと音を立てている。

これだけ自家発電できれば、夏場の冷房も、冬場の暖房も、奥の厨房で使う大型オーブンだって、電気代を気にせずガンガン使えるというものだ。
実際に素晴らしい。

改造その二、温浴施設の拡充。

おっさん、何を隠そう無類の風呂好きでね。

日本にいた頃は、毎日の入浴が何よりの楽しみだった。
だから、この異世界の家でも、絶対に快適な風呂を実現したかつたんだ。

できれば、日本の温泉旅館並みの、広々としたやつをな。

というわけで、『土魔術』と、スキルで購入した防水材や配管資材を駆使し、優に十人ぐらいは一度に入れるんじやないかという、何んでもなく、大きい浴槽を作っちゃった。

やりすぎた感は否めない。

完全に温泉旅館の大浴場だ、これ。

念のため、男女別で二つ作つた。

ただ、今のところはメーネアちゃんと香苗ちゃんと、ときにはオリアーナも加わって三人、四人が一緒に入浴しているから、一つしか使っていない（もちろん、みんな湯あみ着のようなものを作っている）。

「やっぱり、広いお風呂は気持ちいいですね」

「本當ですか？」

湯船に浸かりながら、香苗ちゃんとメーネアちゃんが続けて言つた。

「いや、普通はもつと小さいけどな。でも、手足を伸ばして湯船に浸かるのが、日本人にとつては最高のリラックス法なんだよ」

羨ましいだつて？

いやいや、おっさん的には、たまには一人で手足を伸ばして、のーんびりと湯船に浸かりたかつ

たんだけどなあ。

美女と一緒に入浴しておいて贅沢言うな、と怒られそうだが。

全く、申し訳ない限りだ。

役得だなんて、これっぽっちも思つてないぞ。

本当だぞ。

改造その三、商業施設の建設。

おっさん、この家を手に入れたときから、ちょっとした店を開いてみたいと考えていた。

通りに面した離れを、本格的な店舗に改装しまつたんだ。

これも、日本に帰るためだ。

大きな情報を得るには、金と、人脈がいる。

ここは、そのための拠点だ。

どんな店にするか、トレイナー商会の当主・ロニーさんやオリアーナにも相談したんだけど、最

終的には女性向けの高級雑貨店というコンセプトに落ち着いた。

「女性向けの店、だつて？ シラカワ様が？」

オリアーナに初めてこのアイデアを話したとき、彼女は目を丸くしていた。

「ああ。俺の故郷の品物には、この世界ではまだ誰も見たことがないような、女性が喜ぶものがたくさんあるんだ。それを売れば、きっと大きな話題になる」

「……なるほどね。確かに、シラカワ様が持っているのはあたいらが見たこともないような品々だもの。それに、女相手の商売は口コミが命。一度火が付けば、一気に広まる可能性を秘めてるわ」

さすがは商人の娘。

すぐにビジネスとしての可能性を見抜いたようだ。

オリアーナの目が、好奇心と野心でギラギラと輝き始めた。

目玉商品は、もちろんおっさん特製の石鹼、シャンプー、リンス。

最近では、香苗ちゃんの意見も参考に、日本から取り寄せたクレンジングオイルや化粧水、乳液なんかもラインナップに加えている。

日本が誇る老舗メーカー、王室御用達クラスの一流ブランドのやつだ。

そして、オリアーナに相談したあと、さつそく店として屋敷の離れを生まれ変わらせるにしたんだよ。

店舗の外観は、思い切って真っ白に塗り替えることにした。

もとが『ゴーストが出る』なんて言われる薄汚れた幽霊屋敷だったからな。

陰気な雰囲気を払拭したかっだし、何よりこれから扱うのは女性向けの化粧品や肌着、装飾具だ。
清潔感が命だろう。

この街の建物は、レンガ色や石の灰色、あるいは古びた木の色がほとんどだ。
その中で、陽の光を反射して輝く白壁の壁は、死ぬほど目立つ。

だが、それがいい。

ランドマークとしての宣伝効果は抜群だ。

看板も、スキルで取り寄せた木目の美しい板に、こちらの世界の言葉で店名を彫り込み、二スを塗つて仕上げた特製のものを掲げた。

そして、何よりこだわったのが内装、特に『光』だ。

店内には、『異世界売買』で購入したLED照明や、お洒落なペンダントライトを惜しげもなく設置した。

風車と発電機のおかげで、電気は売るほどあるからな。ケチる必要はない。

夜になると薄暗いオイルランプの明かりで過ごすのが常識のこの世界だ。

影一つない昼間のような、いや、それ以上に眩い光に満ちた店内は、それだけで客の度肝を抜くはずだ。

その圧倒的な光を受けて、ガラスケースの中に並べたシルバーアクセサリーや、色とりどりの化

粧瓶がキラキラと宝石のように輝くわけだ。

壁紙にも工夫を凝らした。

清潔感のある白と、落ち着いた木目調のリメイクシートを貼つて、モダンな雰囲気に仕上げたんだ。

これぞ、異世界における『光と白の魔改造』だ。

完成した店を見たメーネアちゃんと香苗ちゃんは、「まあ、お城よりも明るいですわ！」「日本のお洒落な雑貨屋さんみたい！」と手放しで絶賛してくれた。

さて、開店初日。

「本当に、お客様なんて来るんでしょうか……」

香苗ちゃんが、不安そうに店の入り口を眺めている。

「大丈夫だ。いい品を揃えれば、必ず客は来る」

なんて偉そうなことを言つたものの、おっさんも内心ドキドキだった。

だが、その心配は杞憂に終わつた。

一度来店した客からの口コミで評判が広まつたのか、アフェールの富裕層の奥様方を中心に、開店から一週間も経たないうちに、連日大盛況となつた。

「まあ奥様！ この『しゃんぶー』というものを使つたら、髪がサラサラになりましたのよ！」
「こちらの『りんす』も素晴らしいですわ！ 髪がまるで絹のような手触りに！」
店内のあちこちで、そんな喜びの声が聞こえてくる。

本当にありがたいことだ。

商売の基本は□コミ、つてことだな。

ネット社会の日本でも、結局はそこが一番大事だつたりするし。

しかも、それだけじゃない。

日本から取り寄せた高品質な綿素材の肌着や、デザイン性の高い下着類も扱つていてね。

これがまた、目の肥えた女性たちにすごい評判で、連日飛びるように売れている。

その他には、比較的手頃な価格のシルバーアクセサリー や、一点豪華主義でダイヤモンドのネックレスなんかもショーケースに並べている。

シルバーアクセサリーの方は、そこそこの身なりの若い娘さんが、自分へのご褒美にと頑張つて買つていってくれるようだ。

ダイヤのネックレスの方は……たまに、どう見ても大貴族の奥方様みたいな、とんでもなく気品のあるご婦人が見にこられたりもする。

ただ、おっさん、これに関してはかなり強気の、それこそ家が一軒買えそうな値段設定にし

ちゃつたから、流石にまだ売れてはいない。

まあ、これは半分客寄せパンダみたいなものだから、当分売れなくても構わないんだけどね。それから他にも、日本から取り寄せたさまざまな雑貨（例えば、切れ味のいいセラミック包丁などか、保温性の高い魔法瓶とか、デザインの可愛い文房具とか）も試験的に売っている。

おっさん、これらの商品の仕入れと在庫管理に結構忙しくて、嬉しい悲鳴を上げている状態だ。

日本とはまるで違う需要があつたりして、なかなか面白い。

意外なものが売れたり、逆にこれは絶対売れると思ったものがさっぱりだつたり。

市場調査ってのは、本当に奥が深い。

ちなみに、おっさん、商人としては全くの素人だから、店の実際の運営は、オリアーナに全面的に任せることにした。

店員も、トレイナー商会から何人か優秀な女性を派遣してもらつてね。

全員、明るくて接客態度の素晴らしい人たちばかりだ。

ロニーさん曰く、トレイナー商会ほどの大きな組織になると、有能な人材がいても、その全員が店を持たせてあげられるわけではない。だから、こういつた形で新しい店を立ち上げ、そこに人材を派遣できるのは、むしろ歓迎すべきことらしい。

日本で言うところの、のれん分けに近い感覚なのかな。

あ、そうそう、香苗ちゃんにもやつてもらつてることがあるんだ。

おっさんが提案した新しいサービスなんだけど、店舗の奥に併設した小さなカフェスペースで、来店してくれたお客様に簡単な食事や飲み物を提供してくれている。

こちらも、彼女の作る料理の味が評判を呼び、大変な好評を得ていてね。

香苗ちゃんも、毎日忙しそうに、でも生き生きと働いているのが印象的だ。やつぱり、人は役割があると輝くもんだな。

あまり暇を持て余していると、日本のこととかを思い出していろいろと塞ぎ込んじゃいそそうだからな。

というのが、香苗ちゃんとこのサービスを始めた本当の目的なんだが、どうやら彼女の性にも合っているみたいで、本当によかつた。

そしてメーネアちゃんには、主に貴族の奥様方のお相手をしてもらつていて。

「あら、メーネア様。先日ご紹介いただいた石鹼、主人も大変気に入つておりましたのよ」

「それはようございました。本日、新しい香りのものも入荷しておりますから、よろしければご覧になつてくださいませ」

さすがは元王女様。

貴族社会の複雑な人間関係や、立ち居振る舞いの機微といつたものを知り尽くしているからか、こちらも非常にスマートに、そしていい形でお客様との関係を築けているようだ。
おっさんには到底真似^{まね}できない芸当^{げいとう}だな。

うん。

あんなマダムたちの会話、俺が混ざつたら三秒^{じぞう}で地蔵^{じぞう}になる自信がある。

それと、言つていなかつたことがあるんだが……。

販売する石鹼やらシャンプーやらの詰め替え作業は、まずは一パック、大容量の状態で取り寄せ、それを小さな容器に詰め替えて販売する方法をとることにしていた。
正直などろかかなり面倒な手間仕事なので、こちらは専門の人を雇つてやつてもらつていて。いや、正確に言うと、『雇う』というのとは少し違うかな。

うーん、包み隠さずに言うと、いわゆる『奴隸』を使つていて。

この世界では、奴隸制度というものが当たり前のように存在しているんだ。
おっさん個人としては、倫理的にどうかと思う部分も大きいにあるんだが……。

ただ、この世界の奴隸というのは、主人が何でも自分の好き勝手に扱えるというわけではなく、

ちゃんとした衣食住^{いしょくじゅう}を提供^{ていきょう}し、人間的な扱いをすることが法律で義務付けられているらしい。

下手に暴力を振るつたり、過酷な労働を強いたりすれば、逆に主人が罪に問われ、厳しい罰を科^かされることにもなりかねないそうだ。

まあ、建前^{たてまえ}だけかもしれないが、一定の歯止めにはなるようだな。

そもそもその話をすると、シャンプーやリンスを販売するにあたつて、一番頭を悩ませたのが、それを入れる容器の問題だった。

結局、この世界では、おっさんの美的感覚にかなうような、手頃で品質のいい容器を見つけ出すことができなかつた。
なので、最終的には、日本から無地の安いプラスチック製のシャンプー用ボトルを大量に購入することにした。

そして、そのボトルに、スキルで取り寄せた大容量の詰め替え用シャンプーやリンスを、奴隸の人たちに移し替えてもらうという作業を依頼することにしたわけだ。

こちらの詰め替え作業は、さすがに自宅の敷地内で行うのはいろいろと問題がありそだつたので、街外れに別の作業場を借りてやつてている。

おっさん的には、自家の敷地の一角^{いっかく}でやつてもらえれば管理も楽だと思つたんだが……。
よくよく考えてみれば、そうすると素性^{すじよう}のよく分からぬ多数の人間を、日常的に自家の敷地内

に入れなければならなくなる。

それは、防犯上も、プライバシーの観点からも面倒なことになりそうだったので、別の場所を用意したのだつた。

ただ、そこは福利厚生として、住居や食事、風呂などはきちんと用意している。ブラックな環境にするつもりは毛頭ない。

ある日のこと、俺はオリアーナと一緒に、その作業場を訪れていた。

店の経営を任せている彼女に、現場の責任者として従業員たちの様子を見てもらうためだ。

「みんな、眞面目に働いてくれてるな」

倉庫の中では、男女数人が黙々とシャンプーの詰め替え作業を行つてゐる。

その手際は、日に日によくなつてゐるように見えた。

「うん。シラカワ様が用意してくださったこの環境に、みんな心から感謝してゐみたい。食事も、住む場所も、以前の生活とは比べ物にならないって」

オリアーナの言葉に、俺の胸は少しだけちくりと痛んだ。

「……そうか。なあ、オリアーナ。ここの人たちは、確か『借金奴隸』なんだよな」

「そうよ。ほんと、重い税金が払えなくなつたり、商売に失敗して借金を抱えたりして、やむ

なく自分や家族を売つて奴隸になつた人たちだよ。契約期間を終えるか、誰かが身請け金を払えば解放されるけど……まあ、ほとんどの場合は難しいわね」

オリアーナは、淡淡とした口調で説明する。

それが、この世界の常識なのだろう。

「……犯罪奴隸とは、違うんだよな？」

「うん、全く違うよ。そつちは、罪を犯した罰として身分を剥奪された者たちのこと。行き先も鉱山やガレ一船の漕ぎ手といった過酷な場所がほとんどで、一生解放されることはないの。特に、殺人などの重罪を犯した者は、首輪に刻まれた印も違うし、万が一逃げ出しても、誰からも人間扱いされることはないのよ」

「軽犯罪でも、同じなのか？」

「ううん、盗みや詐欺といった比較的軽い罪の者は、土木作業などに回されることが多いと聞くわ。ただ、一度犯罪奴隸に落ちてしまふと、まともな扱いを受けるのは難しい。だから、ここの人たちのように、ただ不運で借金を背負つただけの借金奴隸とは、立場が天と地ほど違うのよ」

なるほどな。

奴隸といつても一括りにはできない、複雑な事情があるらしい。
俺がそんなことを考えていると、作業場の隅で、一人の少女が母親のそばに座り込み、小さな咳

をしているのが目に入った。

年の頃は、日本にいる俺の娘と同じくらいだろうか。

「おい、あの子、具合でも悪いのか」

「うん……。少し熱があるみたい。だけど、母親の方は、仕事を休むわけにはいかないつて……」

オリアーナの言葉に俺は何も言わず、その親子に近づいた。

母親の方が、俺の姿を見てビクリと体を震わせる。

「ご、ご主人様……！」申し訳ありません、すぐに仕事に戻ります。この子はじきにあちらへ……」

俺はそう言うと、スキル『異世界売買』を発動させた。

取り出したのは、日本製の冷却ジエルシートと、子供用の栄養ドリンク、それから愛らしい丸顔のヒーローが描かれた小さなビスケットの袋だ。

母親が、信じられないという顔で俺を見ている。

「これ、熱さましのシートだ。額に貼つてやつてくれ。こつちは滋養のある飲み物。それと、これはお菓子だ。元気になつたら、食べさせてやるといい」

「こ、こんな……こんな、高価なもの……いえ、それ以前に、奴隸の子供に、このようなお気遣いを……!?」

母親は、涙を浮かべて何度も頭を下げる。

その姿に、俺はまた胸が痛んだ。

この世界では、これが当たり前じやない、ということなんだろうな。

「シラカワ様……」

いつの間にか隣に来ていたオリアーナが、どこか熱っぽい、潤んだ瞳で俺を見つめていた。

「……あんまり、見るなよ。格好悪いだろ」

「ううん。……すごく、素敵よ」

オリアーナは、ふわりと微笑んだ。

おっさん、結局、偽善なのかもしれないな。

奴隸制度そのものを、俺一人の力でどうこうできるわけじゃない。

だが、少なくとも、俺の目の届く範囲にいる人たちには、人間らしい、まつとうな暮らしをさせてやりたい。

そう、強く思つた。

改造その四、鍛冶工房の設置。

店に統いて、離れにある、もともと窯のあつたスペースを本格的な鍛冶場に改造しちまつた。

スキルで耐火煉瓦や巨大な金床、ふいごなんかを取り寄せて作り上げた、自慢の工房だ。

これぞまさに、男のロマンの城。

いつかは物語に出てくるような伝説の剣を打つてみたい。

そう思つたら、もう止まらなかつた。

まずは、以前通りかかつた街の冒険者ギルドの親切なおじさんに紹介してもらつた、腕のいい鍛治職人を訪ねてみることにした。

アフェールでも随一と評判の、ドワーフの血を引くという無骨な老人だ。

「ほう、あんたがロニーの旦那が言つてた異国人かい。で、剣を打ちたい、ねえ。鉄ならいくらでも売つてやるが、うちの道具は貸せねえぞ」

「いや、道具は自分で揃える。それより、何か特別な金属はないか？ 普通の鉄じゃ面白くない

「特別な金属、だと？ フン、素人が何を言うか。まあいい。金さえ払えば手に入るものならいくつかある。例えばミスリルとかな」

「ミスリル！」

俺が食いつくと、親方はニヤリと笑つた。

「なんだい、知つてるのか。まあ、世間じや伝説の金属なんて言われてるが、ありやあ半分は嘘だ。

確かに希少で、普通の剣が百本は買えるほど高価だがな。王侯貴族やS級冒険者くらいになれば、金に糸目をつけずに手に入る。本当の伝説は、神代の金属オリハルコンの方さ。そつちは本物のドワーフでも、一生のうち一度お目にかかるかどうか」

なるほど。

この世界では、ミスリルとオリハルコンで、はつきり格が分かれているのか。

「そのミスリル、少し分けてもらえないだろうか」

「金次第だと言つたろう。だが、生憎と今在庫を切らしててな。あれは北の山のドワーフ共から仕入れるんだが、あいつらに関しては、金だけじゃなかなか首を縦に振らんでな」

グロム親方は、工房の奥から年代物の木箱を持ってきた。

中には、複雑な装飾が施された空のガラス瓶が入つてゐる。

「奴ら、とにかく酒に目がなくてな。特に、珍しい銘柄の酒には目がねえ。前にこの瓶に入つてたブランデーを渡したら、小指の先ほどのミスリルを分けてくれた。王宮に献上する分とは別にな」

あんたも、何か珍しい酒でも持つてるなら、話は早いかもしけんぞ」

「酒……珍しい銘柄……」

それ、俺の独壇場じゃないか！

俺の頭に、前の世界の高級ウイスキーの数々が浮かんだ。

特に、凝ったデザインのボトルで有名な日本の最高級ウイスキー。

あんなものを渡したら、ドワーフたちはどれだけ喜ぶだろうか。

これは、将来的に安定してミスリルを確保できるルートが開拓できるかもしない。

「……親方、分かった。とりあえず、今日は普通の鉄でいい。いや、あなたの店で一番品質のいい

鋼を売つてくれ。まずは、それで腕試しだ」

「ほう。小僧威勢がいいじゃねえか。分かった、うちの最高級のを持っていきな」

それから鋼を購入した俺は工房に戻り、スキル『異世界売買』を発動させた。

ドワーフとの取引は、また今度。ひとまずは試し打ちだ。

だが、練習だとしても、素材にはこだわりたい。

検索ウィンドウに、専門的な単語を打ち込んでいく。

「工具鋼……材……いや、もつとだ。自動車のばねとかに使われる特殊鋼は……あつた

画面に表示されたのは、日本の大手鉄鋼メーカーが製造する最高品質の特殊鋼のインゴット

だつた。

こいつを鍛えれば、この世界のなまくらな鉄とは比べ物にならない剣ができるはずだ。

俺は練習用も兼ねて、その特殊鋼をいくつか購入した。

早速、おっさん自身の手で剣を打ち始めたんだが……スキルというのは本当にすごいものだと改

めた感心した。

なぜおっさんに『鍛冶』スキルがあるのかは、正直よく分からぬ。
しかし、いざ鎌を握つて鉄を打ち始めてみたら、まるで長年修業を積んだ職人のように、体が勝手に動いたのだ。

俺、もしかして才能あつたんじやね？ なんてな。
いや、完全にスキルのおかげです、はい。

今回は、取り寄せた日本製の特殊鋼とドワーフから購入した異世界の鋼を混ぜ合わせて打つことにした。

ふいごで火力を上げ、真っ赤に焼けた鋼の塊かたまりを金床に載せ、リズミカルに鎌を振るう。
カン、カン、という澄すんだ音が工房に響いた。
熱い。

汗が噴き出してくるが、不思議と苦くではなくかった。

品質の高い鋼は、素直に鎌を受け入れ、火花を散らしながら理想の形へと伸びていく。
この感覚が、たまらなく楽しい。

数時間後、一本のロングソードが完成した。

刀身は黒光りし、吸い込まれそうなほど輝きを放つている。

素人が作つたとは思えない、見事な出来栄えだ。

俺は、その剣を持つて、再びグロム親方の工房を訪れた。

出来を見てもらうためだ。

「……小僧、いや、旦那。こいつは、あんたが打つたのか」

俺の剣を見るなり、グロム親方の目がカツと見開かれた。

「ああ。練習でな。どうだ？」

「どうだ、じゃねえ……。この地金じがねの均一さ、焼き入れの確かさ……。何より、鋼そのものの質が、俺が見たこともねえ代物だ。分かつた。あんたには、これを使う資格がある」

親方はそう言うと、店の奥から、大事そうに布にくるまれた小さなインゴットを持ってきた。銀色に鈍く輝く、紛れもないミスリルだった。

「こいつは、俺が隠し持つてた最後の一本だ。金は、まあ、その剣を俺にくれりやあ、それでいい。いや、差額はこっちが払う」

「いや、剣はやるよ。世話になつたしな」

「……そうかい。あんた、面白い男だな」

こうして、俺は図らずもミスリルを手に入れた。

工房に戻り、今度はミスリル銀を炉ろに入れる。

しかも、おっさんは幸いにも火・水・風・土の四属性全ての魔術を扱えるので、試しにそれらの属性の魔力を剣に込めながら鍛えてみた。

すると、何と、いわゆる『魔劍』まがんとでも呼ぶべきものが出来上がつてしまつた。

その魔劍は、ミスリル銀の輝きを宿した美しい刀身を持ち、手に取つてみると恐ろしく軽く、まるで日本のビニール傘ほどの重さしかない。

本当に軽い。

これなら、おっさんでも樂々振り回せる。

まだ実際にこの魔劍で何かを斬つたり、魔物と戦つたりしたわけではないので、どんな特殊な効果があるのか、どんなことができるのかは分からない。

もしかしたら、剣先からビームとか出ちゃつたりするんだろうか。

男の子の夢だよな、そういうの。

だとしたら、ちょっとだけ期待してしまうな。

そんな日々を送る中で、嬉しいニュースが入つてきた。

うちの店に展示していた、あの超高額なダイヤモンドのネックレスが、ついに金貨五千枚で売れたのだ。

どこの大貴族の奥方が、パーティで身に着けるために買つていかれたそ�だ。

金持ちって、本当にスケールが違う。

おっさんには、想像もつかない世界だ。

第一話 帝都への誘いと忍び寄る影

「シラカワさん、実は近々、帝都プレジールへ向かうことになつたのだが、もしよろしければ、一緒にしていただけないだろうか」

我が家への改造も一段落し、店も何とか軌道に乗りました、そんなある日のこと。

トレーナー商会のロニーさんが突然そんな提案を携えて、我が家を訪ねてきた。

どうやら以前、セアリアス帝国の皇帝陛下に貢物をしてみては、と言つていた件が、いよいよ具体的に動き出したということらしい。

「えーと、それはつまり、皇帝陛下に直接お会いする、ということですか」

うわ、来たよ。

一番面倒くさいやつが。

「その通り。実は、私の方から帝都の宫廷へ手紙を出し、シラカワさんが献上したいと望んでいる素晴らしい品々について内々に伝えたところ、何と、エトムント・リーネルト陛下ご自身が、シラカワさんに直接お会いしてくださるとの、ありがたいお返事を頂戴したのです。こんな機会は、中介の商人が一生に一度経験できるかどうかというほどの榮誉。ぜひともシラカワさんに、陛下にお目通り願いたいのです」

面倒くさいことになりそうな予感しかしない……。

俺の小心者センサーが、また警報を鳴らしてるので。

だが、このセアリアス帝国で、それなりに大きな商売をして腰を落ち着けるつもりなら、いずれは避けられない道だったかもしれないな。

できれば、あまり権力の中枢とは関わらず、細々と目立たないように暮らしていきたかったんだが、もう今さら手遅れか。

だが、待てよ。

皇帝に会えるってことは、何か特別な情報……例えば、日本への帰り方とか、そういう話が聞けるチャンスかもしれない。

そう思うと、少しだけ気も変わつてくる。

これも、日本に帰るための情報を得る一步だと思えば……しゃーないか。

おっさん、自分の店を開いてからというもの、最初のうちは慣れることばかりで忙しかった。ただ、最近ではようやく経営者という立場にも落ち着いてきた。

ちなみに、なんだかんだ言つてオリアーナもトレイナー商会の仕事で十分に忙しいので、結局、うちの店の店長は、オリアーナが特に信頼して推薦してくれた、腕利きの女性に任せることになつた。

彼女の経営手腕は確かなものだ。

しばらく離れてても大きな問題はないだろう。

そんなこんなで、さらに一週間が経ち、おっさんは、ロニーさんと共に帝都プレジールに赴くことになつた。

もちろん、メーネアちゃんと香苗ちゃんも、おっさんの『妻』として同行することになる。

まあ、正式な妻つてわけじゃないんだがな。

この世界では二人くらいの年頃の女性が独身でいると目立つてしまうらしく、対外的には異国からやつてきた商人であるおっさんの妻ということにしているのだ。

彼女たちがそう名乗つてくれるのは、嬉しいような、くすぐつたいような。

でも、そのへんの話も、ちゃんとととかないと、あとあと面倒なことになりそうだ。

そして、トレイナー商会からは、万が一の商談や貴族との折衝に備えて、オリアーナも一緒に来ることになつた。

護衛の冒険者たちも、トレイナー商会が万全の態勢で手配してくれた。

「あなた。わたくしも、帝都に赴くにあたつては、何か高価な宝石の一つでも身に着けた方がよろしいでしようか」

いつの間にか、メーネアちゃんのおっさんへの対外的な呼び方が「旦那様」から「あなた」に変わつていた。

何だか、急に夫婦っぽくなつた気がして、少し照れくさい。

そして、香苗ちゃんはといふと。

「あ・な・た。向こうへ着いたら、この前新調した、あの青いドレスを着た方がいいでしようか。それとも、あっちの赤い方が、陛下のお好みに合うでしようか」

と、少し前まで「白河さん」と呼んでいたのが、やはり「あなた」と……。

いや、若干イントネーションが違うような気もするが……そう呼ぶようになつていて。

おっさん、彼女たちの好意には感謝してゐるんだが、この距離感、心臓に悪いって……。

それにしても、帝都プレジールで、日本に帰るための新しい情報が見つかればいいんだがな。皇帝なんていう、一番偉い奴に会えるんだ。

何か知つてゐるかもしないだろ。

そんな、切実な願いを胸に抱いてゐると。

「ねえねえ、シラカワ様。あたいのこと、いつになつたらちゃんと抱いてくれるの」
出発の準備で慌ただしい中、オリアーナが不意にそんなことを耳元で囁いてきた。

メーネアちゃんと香苗ちゃんという、(自称)異世界の嫁が二人もいるというのに、これ以上は

本当に腹いっぱいですから！

「……って、おい！ ちょっと何するんだ、いきなり！」

またもや不意打ちで抱きついてきたよ、このお嬢は。

だから、やめてくれって。

おっさんの甲斐性では、もうこれ以上は本当に無理なんだってば！



帝都プレジール。

セアリアス帝国の首都であり、皇帝エトムント・リーネルトがその全権を以て統治している壯麗な都だ。

おっさん一行は、道中何事もなく無事に王都に到着した。

そして今、皇帝の居城であり、帝国の支配の中心でもあるプレジール城、その玉座の間へと続く廣間に通されている。

宿で旅装を解く間もなく、なぜか朝一番で城から迎えの馬車が来ていて、急いで参内するようになると、かなり強引にせかされた結果がこれだ。

おっさん達は慌てて皇帝陛下に謁見する準備を進めていた。

「おい！ まだ来ないのか！ 待ちくたびれたぞ！ 早くトレイナーと、あの面白いと評判の『異国の人』をここに連れてまいれ！」

そのとき、玉座の方から、やや甲高い、しかしよく通る声が響いてきた。

おそらく、これが皇帝陛下の声だろう。

「陛下、恐れながら申し上げます。トレイナー様ご一行は、まだ到着されたばかりとのことでござります。今しばらくお待ちくださいませぬか」

側近らしき、落ち着いた声の男性が答める。

「そんな悠長な言葉は聞きたくないわ！ いいから、急いで連れてこいと申しておるのだ！」

「は、ははは。かしこまりました。では、大至急お連れするよう手配いたしますので、これにて、
旦失礼いたします」

「うむ、分かればよいのだ、分かればな」

側近の男性が慌てて退出していく。

何だか、随分とわがままな皇帝陛下とお見受けするが……子供かよ。

ただ、伝え聞くところによると、帝都の民からは非常に慕われている名君なのだと。

民の声にもよく耳を傾け、ときには自ら城下にお忍びで出て、直接民衆と触れ合うこともあると
いう。

その豪放磊落な性格と、民を思う深い慈愛の心が、人々の心を掴んでいるという話だ。

「ロニー・トレイナー様、そしてシラカワコジロウ様、この度はお越しいただき恐悦至極に存じます。長旅でお疲れのところ大変申し訳ございませんが、陛下がしごれを切らしてお待ちかねでござりますゆえ、このまま玉座の間へお入りください」

側近の男性が、息を切らしながらやつてきた。

……普通、皇帝陛下に謁見するとなれば、事前にいろいろと面倒な手続きとか、作法の講習とか
があるんじやないのか。

それを全部すっ飛ばして、いきなり本丸とは。
どんだけ急いでるんだか、あの皇帝陛下は。

玉座の間に入り、おっさんはあたりを見回した。
流石はお城。

天井は高いし、柱は太いし、床はピカピカだし。

壁には見事なタペストリーが飾られ、そこかしこに高価そうな調度品が置かれている。

いい雰囲気出してるなあ、本当に。

インダルチャンス王国では、とてもじゃないが城内をゆっくり観光するような余裕はなかつたら
らな。

どんな感じだったかほとんど覚えていないけど、こうして改めて異世界の城というものを見てみると、ここは本当にファンタジーの世界なんだな、と実感する。

おお。ここが、いわゆる謁見の間か。

王様とかにお目通りする、あの場所だな。

何だか、ワクワクするじゃないか。

お、早速、玉座の方から偉そうなのが歩いてきたぞ！

あれが、このセアリアス帝国の皇帝陛下って奴か。

思つたより若いな。

年の頃は、おっさんと同じぐらいか、少し下かもしれない。

はつちやけてる感じの皇帝陛下だな。

「はじめまして……だな。俺は白河小次郎だ。まあ、よろしく頼むよ」

俺は、口二ーさんには悪いが、皇帝の言葉に甘えて敬語はとらせてもらうことにした。

うわ、思ったよりもずっと気さくだな、この人。
というか、距離感がおかしい。

そちらにおるのが、噂のシラカワとかいう、面白いおっさんか
皇帝陛下は、好奇心に満ちた目で俺を值踏みするように見てくる。
「はい、陛下。ご紹介が遅れました。こちらが、シラカワコジロウ殿でござります」
口二ーさんが相変わらずの丁寧な口調で俺を紹介してくれる。

「そうかそうか。お主がシラカワか。敬語なんかいらんからな」

「おいおい、口二ーよ。お主と余の仲ではないか。そんな堅苦しい挨拶はなしでいこうぞ！」

「これはエトムント陛下。機嫌麗しく、何よりに存じ上げます」

口二ーさんが、深々と頭を下げる。

「おお！ 待っていたぞ！ 口二ー、久しいな！」

皇帝陛下は、快活な笑顔で口二ーさんに声をかけた。

精悍な顔つきをしている。



「おうおう、待つておつたぞ、シラカワ！ やはりその方がよい！ 堅苦しいのは性に合わん！」

「そりやどうも。で、もしかして、あんたは俺のことをお待ちかねだつたのか？」

「その通りだ！ 口二ーからの手紙で、あんたの噂はかねがね聞いておつた。どうやら、あの便利な無限収納力バンを、余に献上してくれるという話ではないか。それで、そのカバンはどこにあるのだ。早く見せてくれ」

どんな噂を聞いているか知らないけど……まあ、概ねそんな感じか。

「ああ、そうだよ。その無限収納力バンは、あんたに献上する予定の品の一つだぜ」

「おお！ そうか！ まだ他にも何かいいものがあるというのか！ それは楽しみだ！ お、シラカワ、あんたの後に控えておるご婦人方は、どちらも大変な美人揃いではないか！ もしかして、そのご婦人方も、余への献上品であつたりするのかな」

皇帝が、ニヤニヤしながらとんでもないことを言う。

おいおい、セクハラだぞ、それ。

パワハラもプラスして、コンプライアンス的にアウトだぞ。

「おいおい、やめてくれよ、陛下。彼女たちはそういう対象じやないんでな。冗談でもそういうのは勘弁してくれ」

俺が釘を刺すと、皇帝は「がつはつは！」と豪快に笑つた。

「そうかそうか、それは失礼した！ って、ん。よく見れば、その一人は、口二ーの娘のオリーナではないか。おい、口二ー、いくら余でも、結婚の時期を大きく過ぎた婦人は、ちと好みに合わんぞ！」

皇帝が、オリアーナを見て、またもや失礼なことを言う。

この世界では、やはり二十五歳を過ぎた女性は、結婚が遅いと見なされる風潮が強いらしい。

オリアーナ、めっちゃいい娘さんなのに、失礼な皇帝だな、おい。

あとで裏庭に来い、説教してやる。

「いえ、陛下、誠に申し訳ございませんが、実は、娘のオリアーナは、既にこちらのシラカワ様の妻の一人として、お仕えすることになつておりますので」

口二ーさんが、しつとそんなことを言つた。

……つて、おい！

だから、まだもらつてねーし！

何、その、おっさんが既にオリアーナを妻にした前提みたいな話し方は！

隣でオリアーナも、頬を染めてもじもじしてゐるんじゃないよ！

「おお！ そうであつたか！ シラカワ、あんたも隅に置けんな！ わざわざ年嵩の婦人を娶るとは、なかなか物好きよのう！ まあ、このオリアーナの気立てのよさと商才は、この余が保証する。